

生ごみ消滅容器 「キエー口」の使い方

湖西市廃棄物対策課

TEL 577-1280

○ 特徴

土中の微生物の力で生ごみを分解するので維持費はかかりません。汁物、くさった物、カビのついた物なども入れられ、虫や臭いは発生しにくいです。

キエー口内の土は生ごみを分解し、養分を含んでくるので、たい肥としても使うことができます。

1. 使用開始前・設置イメージ



☆ポイント
草を抜いて、フカフカになるようたがやす。

庭の日当たりと風通しの良いところを選びます。



キエー口を設置します。



庭や畑の土か、黒土を8分目まで入れます。
粘土や砂は使わないでください。

2. 細断した生ごみを2～3日間ためる (ためたくない場合や、腐りやすいものは、直ぐに埋める)



☆ポイント
微生物が分解しやすいように、生ごみを細かく切って！

○2～3日間、生ごみをフタ付きの容器にためます。
水に濡らさないうちに容器に入れて下さい。

○米ぬかをかけると腐敗しにくく、発酵が進みます。
(かけなくても問題ありません)

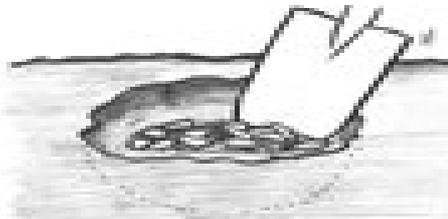
※ためる期間は2～3日としました。
季節や世帯人数により増減してください。

3. 投入方法

☆ポイント
表面は乾燥、中は湿っている状態が良い！



○生ごみが表面に出ないように、深めに穴を掘ります。(深さ25cmほど)

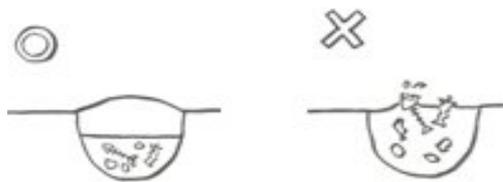


○生ごみを入れて、和え物を作るように周りの土とよく混ぜます。
シャベルで切るように混ぜると分解が早くなります。
※中の土が乾燥している場合は水を入れてください。
(水分量は、手で握って固まる程度の50～70%ぐらいが最適です。)

4. 土をかけて、埋める

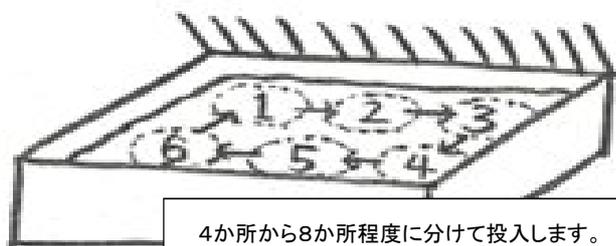


○上から乾いた土を5～6cmかぶせ、生ごみを完全に覆います。
そうすることで虫や臭いの発生を防げます。



埋める場所を変えながらくり返します。一巡したころには最初の生ごみは消えています。(冬期以外)

※厳冬期には、分解に2週間程度かかる場合があります。



4か所から8か所程度に分けて投入します。

分解できないもの

○果物や野菜の種 ○太い骨(鶏など) ○貝殻
↑発芽する場合があります

投入するときの注意点

○細かく刻んで入れましょう
○土で完全に覆いましょう
○土を握って形が残る程度が、良好な水分量です。

☆ キエー口使用上の注意事項 ☆

入れてはいけないもの

薬品、たばこの吸い殻など、人間が食べられないものは、微生物も分解できません。
(貝殻、大きな骨なども)

失敗しないポイント

①大きなものは細かく刻む 例：キャベツの芯なら3～4分割	②土とよく混ぜ合わせる 生ごみに土がまんべんなく、まぶされるように
③土の水分量は50%～70%を目安に 手で握って固まる程度がちょうどよい	④乾いた土で覆う 埋めた生ごみの臭いが漏れないように

キエー口 Q & A

①	蟻が発生	⇒	土が固くなっていると、地面と勘違いして蟻が巣を作ることがあります。土をほぐして柔らかくすれば、巣を作られません。
②	ダンゴムシが発生	⇒	放っておけばいなくなります。 どうしても気になる場合は、熱湯や殺虫剤をかけて駆除できます。
③	土の中に何かの幼虫が発生	⇒	アメリカミズアブの幼虫だと思います。殺虫剤をかけても良いのですが効かないものもあるので、気になるようであれば、熱湯をかけて駆除します。 ※アメリカミズアブの幼虫（俗にいう便所バチ）・・・海外では、微生物よりも分解が早いのので、あえて、この幼虫を使って生ごみを処理しているところもあります。湿度60%程度の生ごみを好みます。生ごみが無くて乾燥していれば、いなくなります。 キエー口の設置場所が、日陰で表面の土が湿っていると、成虫が生ごみの臭いに寄せられて、産卵します。（生ごみ処理では、発生しやすい虫です。） * 予防策 * 生ごみを入れたら、土とよく混ぜ合わせて生ごみの臭いが出ないように深く埋めてください。生ごみが固まりになっていることが原因である場合が多いですが、そのまま土で埋めて、生ごみが分解されればいなくなります。
④	殺虫剤や熱湯をかけたとき、微生物への影響は	⇒	殺虫剤や熱湯をかけても、キエー口内の微生物には、影響ありません。
⑤	表面の土にカビが生えた	⇒	おそらく糸状菌（カビ）です。生ごみ処理をしていく過程において発生する菌種です。分解がうまくいっている証拠です。 * 生ごみ処理過程において、変わる菌の種類 * 糸状菌（かび）の仲間 → 好気性菌（放線菌など） 【糖類やアミノ酸を分解】 【繊維組織（セルロース）などを分解】
⑥	生ごみが消えにくい	⇒	使い始めのころは、微生物が活性化していないので時間がかかります。分解途中のものが多少残っていても次の生ごみを埋められます。生ごみを入れる際に、米ぬかや使用済み食用油（大さじ1から2杯程）を混ぜて入れると、微生物が活性化して分解が早まります。
⑦	コロコロの土の固まりが出た	⇒	使い始めて、一か月程度経つと土の表面に、コロコロとした土の固まり（団粒）が現れる場合があります。これは、生ごみが分解されて変化したものなので安心してください。固まりは崩しておくのと、次に生ごみを埋めるときに埋めやすくなります。（たい肥として使えます）
⑧	土の表面に虫が発生	⇒	生ごみが土の表面に露出していることが原因です。深く埋めるようにしましょう。

まとめ

- 土の表面が乾いていて中が湿っているくらいが、良い土の状態です。中の土がサラサラに乾いてしまうと微生物が生きていけませんので、生ごみはあまり水を切らずに入れてください。使っていると中の土が乾いてしまうことがあります。その場合は、水や米のとぎ汁を入れて、水分量を調節しましょう。
- 夏期は3～5日間程度で生ごみが消えますが、冬期は2週間程度かかる場合があります。分解途中の前の生ごみが残っていても、続けて入れて処理を続けましょう。（投入物によって期間が増減します）
- 生ごみ処理した土は、家庭菜園などに利用できます。